
継ぎ接ぎだらけの世界

レイフォルス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

継ぎ接ぎだらけの世界

【Nコード】

N8426Y

【作者名】

レイフォルス

【あらすじ】

今よりも少し未来の話。科学が進歩した世界では宇宙に行くのは人ではなく、ロボットだった。

あらゆる機械の性能が上がり、人々の生活は非常に豊かだ。

この物語は、そんな世界に暮らす1人の青年の物語です。

序章（1）

高いビルが集う摩天楼。その路地裏で、3つの人影が走っていた。ガツシリとした筋肉質の身体を揺らし、夜の帳が満ちた道を疾走する。

体格からして、恐らく3人とも男性だろう。闇夜に紛れる様に、服装を黒色で統一し、1人は巨大なズタ袋を右肩に担いでいる。男達は息を切らしながらも、必死に足を動かしていた。

足音だけがその場を反響し、静寂が支配していた空間に息を吐く音と、鉄が力チャ力チャと鳴る音だけが響く。

最後尾を走る1人が不意に背後を振り返る。振り返った瞬間、彼は瞠目した。

何故ならその背後には、紅蓮の外套を纏った“死神”が追い掛けていたからだ――

人の血をそのまま被ったかのように紅い外套。頭をフードで覆い、顔には無表情を飾る仮面が被られていた。

喜怒哀楽を何にも灯さない無表情の白い仮面。目のある所に開いた穴は五角形を逆様にしたような形で、左穴の方には血の涙が垂れた様な細く紅い線が走っている。

その仮面を被った人物の体格は華奢で、ほっそりとしていた。両手にも紅いグローブが詰められ、黒い服装の男達とは対照的である。

鎌を持たない“死神”はピッタリと彼等の背後に付き、足音は愚か、気配すら感じさせないほど希薄の状態で付いて来ていた。

空気と同化でもしているようで、その存在に全く気が付かなかった。まるで、本物の死神の様に……。

「ひっ！」

その姿を確認して、男Aはか弱く、情けない声を喉から絞り出す。その声に反応した前を走る2人が振り返ると、同じく恐怖に顔を歪めた。

不気味な仮面を被った人が何時の間にか自分たちの背後を走って居たら、誰でも腰を抜かすほど驚くだろう。

だが、それは彼等にも言える事だった。この男達も、顔には黒い覆面を被っているのだ。まるで、「犯罪者」のように。

最後尾の男Aが腰に巻き付けた拳銃用ホルスターから自動式拳銃を抜く。

自動式拳銃は撃鉄を倒す必要もなく、排莖や次弾装填を自動化した拳銃である為、引き金を引けば直にでも撃てる。

男Aは躊躇わずに狙いを付け、引き金を引く指に力を込めた。その刹那、銃口から銃弾が発射され、遊底から空薬莖が飛ぶ。

“死神”は放たれた1発の弾丸が通り過ぎるであろう弾道から身体を逸らし、銃弾と擦れ違うタイミングを合わせて地を思いつき蹴り付ける。

一気に男Aの懐に入り込み、鳩尾に拳を放つが、咄嗟に男Aが身体を半歩引いてソレを避け、ナイフホルスターからシークレットナイフを素早く抜く。

全長約240ミリ、片刃ブレード仕様のナイフが奔り、空気を斬り裂く。しかし、月光によって銀光を放つ刃は“死神”を斬り裂く事は出来なかった。

序章（2）

男Aの風いだシークレットナイフは“死神”の左によって止められていた。片刃の上を紅のグローブがガシッと掴み取り、ビクともしない。

しかし、その行動は男Aには想定内だったようで、ニヤリと邪悪な笑みを浮かべると至近距離で自動式拳銃を向ける。

パンツと乾いた発砲音が響き、命を一撃で吹き飛ばすであろう銃弾が“死神”の頭部に放たれる。だが――

男Aは、今度こそ驚愕した。超至近距離で撃った銃の弾を首を捻る動作だけで躲けて見せたのだ。

仮面の頬の所には薄らと銃弾が掠めた跡があったが、その動きは人間に出来る芸当ではない。真後ろで様子を窺っていた2人からも、息を呑む音がした。

男Aが驚いている隙に、“死神”は右足を半歩後ろに引き、右手の拳を振り被る。今度は外さないとばかりに、左手で掴んだ男Aの左腕を強く握り、拳を放つ。

「ぐはあああつ！！！！！」

ガツと鈍い音が響き、悲鳴が空間を轟く。捻りを入れた一撃は、男Aの腹部に深く突き刺さり、彼の身体は宙を舞う。

打っ飛んだ男Aは前方に居る2人の上を優に超えると、ゴロゴロと

転がり、道の分岐点の壁に激突した。

「て、テメエよくも!!」

「殺してやる!!」

男Bは担いでいたスタ袋を下ろすと、ホルスターからマシンピストルを取り出す。マシンピストルとは、フルオート射撃可能な拳銃サイズの火器の総称である。

通常、セミオートのみの自動式拳銃にフルオート射撃機能を追加したものを指すが、自動式拳銃に近い大きさの小型の短機関銃を指す場合もある。そのため異なる特徴を持つ二種類の銃を指しており、意味の曖昧な名称となっている。

男Cも同じくマシンピストルを抜き、撃つ。しかし、それでも“死神”は臆する事が無く、残りの2人に突っ込んだ。

背を低くし、まるで地面を滑るかのように銃弾の雨の中を駆け抜ける。このままでは撃たれると悟るや否や、両足をバネの様にして高く飛躍する。

真横の壁に蹴りを入れ、反対側の壁も同じく蹴る。とある有名なゲームのマ。オの様に、何度も蹴りを入れて連続壁ジャンプをした。

地上照らす満月を紅い影が横切り、男達に急接近する。彼等とは中々当たらない“死神”に苛立ち、マシンピストルからナイフへと切り

替えた。

「死ねえええ!!!」

地面に着地した“死神”に大振りではなく、最小限の動きによって放たれた突き。この動きからでも、彼等は明らかに一般人ではない。

まあ、そもそも一般人がこんなに武装などはしていないが……。

男Bの突きが“死神”の射程距離に入った途端、視認出来ない程の高速な手刀が男Bの手を弾き、ナイフが手から吹き飛ばされる。

そして、突きをしたポーズのまま突っ込んできた男Bにカウンターとして膝蹴りを入れ、意識を強制的に削り取った。

「後ろがガラ空きだあ!!!!!!」

背後に何時の間にか移動していた男Cは男Bと同様にナイフを構えて突っ込んでくる。

だが、“死神”には後ろにも目があるのか、彼の一撃を振り向かぬまま躲すと、伸びた腕を小脇に挟み、思いつきり力を入れる。

すると、「ぐああああ!!!!!!」と悲鳴を上げながら、握っていたナイフを地面に落とす。そして、その格好のまま左肘で男Cの腹に重い一撃を入れた。

序章（3）

全員が気絶した事を確認し、“死神”は男達を一箇所に集める。背と背が合わさる様にして座らせると、左手を外套の袖の中に突っ込む。

そして、ギイイと何かが回転する音と共にワイヤーが其処から伸びた。それで彼等の身体と手、足を縛り、完全に無力化にする。

“死神”は一息付くように肩を揺らすと、次に男Bが持っていたズタ袋に近付く。紐を緩め、中を見てみると――

――その中には、1人の少女が入って居た。

艶やかな黒髪に、細い眉毛。顔の輪郭は整っており、筋が通った小柄な鼻。

肌は雪のように白く儂く、それでも餅のような柔らかかな弾力がある。ふつくと膨れた両頬の間には桜色の唇がポツンと咲いている。

服装は紫色の綺麗な和服を纏っており、その容姿からも、明らかに一般人とは思えない。まるで大和撫子を体現したような美しい女性だ。

あの男達は、恐らくこの女性を誘拐しようとしたのであろう。一目でも彼女が何処かのお嬢様だと理解出来る。

風が吹く度に腰ほどの長さがある髪先は揺れ、彼女の顔に髪が掛かった。だが、それでも、彼女はピクリとも動かず、双眸を開こうとはしない。

心配になった“死神”は左手のグローブを取り、首に手を伸ばして脈があるか確認する。すると、手には「トクン、トクン」と、鼓動がちゃんと伝わった。

肌が少し冷たいが、外傷も特になく、安堵の溜息を吐く。その瞬間、

「うつん……誰……？ 此処は何所……？」

薄らと彼女の瞳が開き、口から鈴の音のような凜とした綺麗な声が呟き出される。まだ寝惚けているのか、眠そうに欠伸をすると、コクリコクリと船を漕ぎ出した。

多分なのだが、睡眠薬の量が思ったよりも多かったのだろう。脳が、まだ此処が現実か夢かを理解出来ていない。

「大丈夫、今は安心してお休み」

此処で初めて、“死神”が声を出す。その声は、男性とも女性ともとれる特有な声で、優しく安心出来るモノだった。

そして“死神”は何処からかスマートフォンを取り出すと、何処かに電話を掛ける。

『はい、此方。○警察署です』

「もしもし、。。。ビルの路地裏に怪しい3人組が居るので、直に来て頂けますか？」

聴て通話を終え、“死神”は闇の中へと消えて行くのだった……。

朝、とある一室。1人の青年がベッドの上で気持ちよさそうに眠っていた。

彼の名前は片桐^{かたぎり} 玲衣^{れい}。黒目黒髪が生粋の日本人で、かなり整った容姿をしている。

そんな青年に、1つの小さな影が忍び寄っていた。その影は、玲衣の寝ているベッドの上に飛び乗ると、耳元で「ニヤア〜」と鳴く。

そして、玲衣の顔を肉球でプニプニと押すと、再び「ニヤア〜」と鳴いた。すると、玲衣は身動きをしながら重い瞼を開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8426y/>

継ぎ接ぎだらけの世界

2011年11月27日19時51分発行